

目次

凡例……………viii

序章 『後拾遺和歌集』 雑歌論——「雑三」の構造と特性……………1

一 「雑歌」という分類意識……………3

二 「雑三」の和歌世界……………4

三 『古今集』と『後拾遺集』の「雑歌」……………20

四 『後拾遺集』「雑三」の特性……………23

第一章 部立と構成……………27

第一節 『後拾遺和歌集』「雑四」の構造と特性……………29

一 「雑四」の構成……………	29
二 巻頭の松歌群……………	30
三 二十三首の名所歌……………	34
四 巻末の日常消息的歌群……………	43
五 雑歌の構成と藤原通俊の和歌観……………	46
第二節 『後拾遺和歌集』 「恋四」の詞書をめぐる問題……………	51
一 「恋四」の詞書表記……………	51
二 詞書記述内容の分類……………	52
三 「恋四」の詞書記述の性格……………	53
四 詞書中の固有名詞記載……………	59
五 「恋四」の詞書記述の特色……………	64
第三節 『後拾遺和歌集』 俳諧歌ノート(1)……………	67
一 『後拾遺集』の俳諧歌……………	67
二 『後拾遺集』俳諧歌の意義と特性……………	69
第四節 『後拾遺和歌集』 俳諧歌ノート(2)……………	81
—— 構成と歌人に注目して ——……………	81
一 『後拾遺集』俳諧歌の質的変貌……………	81
二 撰者の俳諧歌編纂意識……………	83
三 恋歌的な俳諧歌……………	86
四 『後拾遺集』俳諧歌歌人とその構成……………	90
第二章 歌人論……………	95
第一節 『後拾遺和歌集』女性歌人増大の意味するもの……………	97
一 『後拾遺集』の女性歌……………	97
二 女性歌人増大の意味……………	98
三 詠み人しらずの女性歌……………	104
四 女性歌人増大と中世和歌への萌芽……………	108

第二節 『後拾遺和歌集』「詠み人しらず」歌考……………111

- 一 『後拾遺集』の「詠み人しらず」……………111
- 二 『後拾遺和歌集』「詠み人しらず」歌存在の実情……………112
- 三 『後拾遺和歌集』「詠み人しらず」歌の作者判明歌……………119
- 四 撰者通俊の撰集意識と「詠み人しらず」歌……………125

第三節 藤原通宗小考……………127

- 一 藤原通宗の閲歴……………127
- 二 通宗の動向……………128
- 三 歌学者としての通宗……………136

第三章 表現と歌風……………141

第一節 『後拾遺和歌集』の詞書をめぐって……………143

- 一 『後拾遺集』の詞書の特質……………143

- 二 羈旅、雑部の「題しらず」歌……………148
- 三 詞書における「心を詠める」……………151
- 四 詞書表記の特色と撰者の意図……………153

第二節 『後拾遺和歌集』「題しらず」歌の二、三の問題……………157

- 一 『後拾遺集』の「題しらず」歌……………157
- 二 源道済の「題しらず」歌……………160
- 三 永源法師、藤原元真の「題しらず」歌……………162
- 四 『後拾遺集』「題しらず」歌の理由……………166

第三節 『後拾遺和歌集』の新風をめぐる一考察……………169

—— 僧侶歌人詠が担ったもの ——……………

- 一 『後拾遺集』の僧侶歌人……………169
- 二 『後拾遺集』の僧侶歌人の状況……………170
- 三 僧侶歌人詠の特性……………172
- 四 雑歌中の僧侶歌……………177

五 「雑三」の僧侶歌……………	180
六 僧侶歌評価と『後拾遺集』の新風……………	182
第四章 『後拾遺和歌集』の周縁……………	185
第一節 『更級日記』萩の葉小考……………	187
一 「萩の葉」歌の背景……………	187
二 和歌素材としての「萩の葉」……………	190
三 伝統的和歌表現の日記介入と悔恨の潜流……………	193
第二節 王朝女性歌人の「月」——『後拾遺集』を中心に……………	195
一 王朝文学の「月」……………	195
二 『後拾遺集』の「月」……………	197
あとがき……………	207
初出一覧……………	209
索引……………	213

凡例

一 本書内で用いた作品の本文は、左記によっている。ただし、漢字・仮名表記などについては改めた箇所もある。

- * 『新編国歌大観』（角川書店）
- * 『新編私家集大成』
- * 新編日本古典文学全集14 『更級日記』
- * 新編日本古典文学全集31～33 『栄花物語（1～3）』
- * 新編日本古典文学全集18 『枕草子』
- * 新編日本古典文学全集87 『歌論集』 「古来風体抄」
- * 新日本古典文学大系29 『袋草子』

一 本書掲載の基となった発表論文については、なるべく原態のままとしたが、誤植や多少の補足等の訂正がある。

一 「雑歌」という分類意識

「雑歌」とは、『古今和歌集』の「仮名序」に「あるは、春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ、選ばせたまひける」とある如く、四季の部にも、また、賀、恋、離別、羈旅の部立にも入らない和歌を「雑歌」という部内に収容させたという意味である。

このような他の部立から、はみ出した和歌が、最後に寄せ集められて出来る「雑部」は、反面それゆえにある種の自由さを持ち、創作主体である撰者の新しい試みはこの雑部に示されたのではなからうかと考える。そして、その試みも種種相を繰り広げるのである。また、雑歌は、自然を対象として、それに働きかけ、そこから受け取る心情の吐露を詠う四季歌とは異なり、人間と人間の、人間と社会の関係における生活の根底から生まれるものである。そのような人間の精神史を詠うため、雑部が比較的に日常消息的色彩の濃い歌を集め、それだけに時代の風潮をよく反映しているといっても良い。この雑部の分類意識をめぐる問題については、諸先学⁽¹⁾の成果があり、それらによりながらいくつかの問題について考察していきたい。

古代和歌史の終焉を迎え、中世世界への橋渡しとしての役割を持つ『後拾遺集』を形成している歌人たちの苦悩をも読みとることもできよう。自然と人生の雑多な裡に、無常観を主位に置き、それを現実

の世界を貫くことを理念としている。この無常観は、撰者や歌人たちが抱く人生観であると共に、当時の時代通念でもある。このような思想は次第に宗教的な色彩が強くなって、「神祇」、「釈教」部へと傾注されていく。『後拾遺集』では、この宗教性の発露を「神祇」、「釈教」を一部立として立てねばならなかった撰者の意図にも、この著しい宗教思想の浸潤を感じさせられる。それはまた、宗教の季節といわれる中世の前夜にもあたり、この時代の精神を反映し、次第に吸引される特色として和歌史の上からも重要視されねばならない。

以上の観点から、『後拾遺集』の雑歌を取りあげ、その構成意識と特性について考察し、そこに包括された概念を抽出することで、撰者の意識や選集意図なるものを把握することが目的である。

二 「雑三」の和歌世界

『後拾遺集』巻十七「雑三」は、全体が無常の歌で占められ、その点で『古今集』の雑下巻に似ると言われる。⁽²⁾確かに、六巻に分類された雑歌のうち「雑三」に所収された七十首の詠歌は、それらの詞書に叙述された場や、歌の内容等から「無常」という観念を表白していると思われる。だが、視点を変えれば、『古今集』的な無常観とはいい得ない、性格を少し異にする部分もあるように感じられてならない。ここでは、そうした『後拾遺集』「雑三」の詠歌への疑問を媒介にして、その構造や特性を考察し、

『後拾遺集』の雑歌について考察してみようというものである。

「雑三」の歌の内容から整理すると、おおよそ次のような構成になっていると思われる。

- 一、官職に関する歌(971～981) 11首
- 二、厭世的な歌(982～993) 12首
- 三、都を離れた僻遠の地での歌(994～1000) 7首
- 四、世の無常の歌(1001～1018) 18首
- 五、出家や隠棲に関する歌(1019～1040) 22首

この構成は、『古今集』「雑下」とほぼ合致し、司召にもれた嘆きから始まって、徐々にあはれを誘い、無常を感じさせ、出家や隠棲に至るといふ過程の排列法がとられている。しかし、それぞれの歌群ごとに少なからず『古今集』とは異質で、『後拾遺集』独特な一面も見い出せるようにも思われる。そこに焦点をあて、詠歌に則して具体的に考察してみることにはしたい。

冒頭から十一首は、官職に関わる歌が連続する。その「雑三」巻頭歌(971)は、元輔の、

備中守棟利みまかりにける人人のぞみ侍りと聞てうちなりける人のもとにつかはしける、
たれかまた年経ぬる身をふり捨てて吉備の中山こえむとすらん

である。元輔は、本集に二六首を入集する代表的歌人で、詞書に記された備中守棟利は清少納言の夫棟